2105　離島覚書（長崎県・椛島）

奈留島舅ケ島から椛島を望む。左手前がツブラ島

令和３年６月 23 日

２つの中心集落

椛島は福江島の北東約 15 ㎞に浮かぶ。２つの島がくっついたように見え、その境目の地峡部を中心に蝶が羽を広げたような形をしている。地峡部は僅か 200ｍほどの幅しかない。

狭義の五島列島は、福江島、久賀島（ひさかじま）、奈留島、若松島、中通島で構成されるが、椛島はこの主要５島に次いで大きく、面積は 8.68 ㎞^{2}、周囲は 27.5 ㎞である。大きな集落が島の北部と西部にあり、北部の集落が本窯（もとがま）、西部の集落が伊福貴（いふき）である。両集落にはそれぞれ漁港（第１種）が整備されており、木口汽船が運航する旅客船「ソレイユ」が発着している。ソレイユは福江島と椛島の間を１日３往復しているが、往路の第２便と第３便、復路の第１便は本窯漁港には寄らない。

椛島は南松浦郡樺島村として１島１村の行政を敷いていたが、1957 年に福江市に編入され（福江島の福江町と奥浦村、崎山村、本山村、大浜村、２次離島の椛島村と久賀島村の１町６村が合併）、北部が本窯町、西部が伊福貴町となる。その後、2004 年に福江市とその周辺の５町が合併して、現在の五島市になった。なお椛島は以前、「樺島」と表記していたが、長崎市の野母崎の先端にも樺島という島があり、これとの混同を避けるために 1950 年代後半から「椛島」と表記している。したがって 1950 年代以前の資料はすべて樺島だが、ここでは基本的に現在の表記を採用する（固有名詞は別）。

福江港ターミナル２階の食堂でちゃんぽんを食べる。荷物をコインロッカーに預け（400 円）、13 時 15 分発の第２便で伊福貴漁港に向かった。この便は伊福貴に直行するので、所要時間は約 20 分だった。

当初、椛島に泊まる予定で、伊福貴地区にある島で唯一の民宿・増栄丸に連絡をとった。

この民宿は水産加工品をつくっており、取材も併せて行うことにしていた。紆余曲折があって民宿への宿泊は断られたが、取材の方はＯＫとなり、女将さんが港に迎えに来てくれることになっていた。ところ港に着いてみると、彼女の姿は見えない。後でわかったことだが、この人は気持ちがかなり揺れ動くようで、途中で気分が変わったようだった。

当てにしていた民宿の女将がいないので、先ずは島の情報を得ようと、五島市役所の椛島出張所を訪ねた。ここには診療所が併設されている。

椛島港に着岸した旅客船・ソレイユ（左）、五島市役所椛島出張所と診療所（右）

伊福貴

出張所の女性に世帯数と人口を聞く。2021 年６月１日現在の住民基本台帳上の人口は 101 人、世帯数は 72 戸とのこと。2015 年国勢調査時の人口は 129 人、世帯数は 89 戸であったから、この時点からさらに人口、世帯数ともに減少している。住基台帳は伊福貴と本窯の両町に分けられており、伊福貴町は 44 戸、66 人、本窯町は 28 戸、35 人で、伊福貴地区の方がおよそ２倍多い。両町は島の地峡部を境に北側と西側に分かれていることはすでに示したが、主要集落以外にも点在集落があり、その人口も含んでいる。なおかつて比較的大きな集落を形成していた芦ノ浦地区には現在２世帯２人が住んでいるとのことで、こちらは本窯町に含まれる。

椛島の人口のピークは 1951 年の 3,425 人で、世帯数は 600 戸ほどあった。当時は後述するようにイワシの揚繰網漁業で島は活況を呈していたのである。イワシが消えて漁業が衰退、一方貨幣経済化が進むと、島外への人口流出が加速され、この 70 年間に人口は 1/30、世帯数は 1/8 ほどに激減してしまった。五島列島の中では、その減少率はひときわ際立っている。

伊福貴の集落は漁港背後の狭い土地に密集している。旅客船が発着する浮桟橋を渡ると待合所があり、その右側が漁協、左側に少し行ったところに蛭子神社が置かれている。集落のすぐ背後に山が迫り、平地がほとんどなかったため漁港の奥まった土地は埋め立て造成されたものである。出張所の傍にその記念碑が立っていた。石碑が立てられたのが 1939 年３月なので、それ以前に工事が行われたのだろう。ちなみに工事費は当時のお金で５万円であった。

埋立地以外の旧来の土地に建つ家は高い石垣を造成した上に建てられている。古い写真をみると、人家は海のすぐ近くまで密集し、集落背後の険しい斜面には段々畑が作られてい

た。しかし今はすっかり自然林に覆われ、ごくわずかな家庭菜園があるだけになっている。

伊福貴の集落には、市役所の出張所の他に、診療所、郵便局、漁協などの公共施設があり、また酒屋と雑貨を扱う小売店舗もある。宿泊施設は上述した通り、民宿が１軒だけだ。

出張所の女性に島の歴史について書かれたものはないかと尋ねると、もともと椛島の出身ではなく嫁いできたので島のことは詳しくないという。詳しい人がいるといって川上弥久美さんを紹介してくれ、家まで案内してくれた。

伊福貴の集落、目の前の島がツブラ島（左）、高い石垣が築かれた土地に建つ家（右）

郷土史家・川上弥久美さん

川上弥久美さん（73 歳）の家は出張所から 10mほど離れたところにあった。玄関の防風対策の工事をしているところだったが、工事は職人に任せ、話を聞くことができた。暑い日だったのでクーラーが効いた公民館に移動する。彼は分厚い資料を持ってきてくれた。

川上さんはまさに私と同級生で、団塊の世代のトップである。若い時は漁協で働き、その後長いこと郵便局に勤めており、郵便配達をしていたので、島の家々を知り尽くしている。

川上さんから椛島の歴史、漁業、カクレキリシタンについて話を聞き、資料もコピーさせていただいた。以下に聞き取り結果を整理しておこう。

島に人が住んだ歴史は古く、学校（旧本窯小学校北西側の台地）の近くで矢じりや石斧、石ナイフが出土、島には縄文時代の遺跡が残っている。ただし川上さんは、この縄文遺跡は海面が今よりも低く、陸続きだった時代のものだという。島になってから人が住むようになったのは中世から近世にかけてとみられている。

多くの島に平家伝説があるが、椛島も同じだ。平重衡の三男の伊王三郎が源氏の追手から逃れて、相ノ浦の多良次郎の家にかくまわれ、その地で結婚して姓を桑原と改め、家臣一同 27 名を従えて椛島にやってきて芦ノ浦の東南高地に住み着いたという説で、福江市史にも書いてある。しかし、川上さんによるとこの平家移住説は怪しいという。

無人島であった椛島に最初に住み着いた人たちは、川上さんによると瀬戸内海からの漁業移住だったのではないかという。その根拠は島に残る祭りの形態が瀬戸内海の山口県光市室津のものと似ていることで、先方の室津からも椛島に調査に来たことがあるそうだ。瀬戸内海は漁師が多く過密であったから、新たな水産資源を求めて椛島にやってきて、海岸付近の入り江に集落を形成した。その集落が現在の伊福貴、本窯、芦ノ浦の各集落で、いわゆる「地下」の集落となった。

1664（寛文４）年に五島守清が 3,000 石で分家の富江藩を創設し、椛島は富江藩に属することになったが、その前は桑原家が島を統治していた。富江藩になってから、桑原家は庄屋となり、兄は本窯、弟は伊福貴に分かれた。当時の椛島の生業は製塩業で、山から木を伐採し、これを燃料に海水を煮詰めて塩を作っていた。いわゆる窯百姓で、本窯の地名は塩づくりに由来し、年貢は塩や薪炭であった。石高は 20 石で、これは塩１俵に相当したという。

江戸時代中期には五島藩の移民受け入れ政策によって、外海地方から多くの開拓民が五島地方に移住してくる。その移民の子孫が再移民として椛島に入植し、後述する点在集落を形成、農業を中心とする自給生活を営んだ。彼らはいわゆるカクレキリシタンで、このことは後述する。

明治・大正・昭和初期には椛島は定置網を中心とする漁業で発展する。本窯には新屋（しんや）（桑原家）という屋号の網元がおり、この地方では屈指の網元として栄えていた。しかしこの新屋は昭和初期にかけて没落する。また捕鯨も営まれており、日本水産の系列の基地があった。

戦後の 1940 年代後半から 50 年代前半にかけての数年間はイワシの大規模な魚群が椛島海域に回遊してきたこともあり、椛島は揚繰網によるイワシ漁業の五島地方の一大拠点として繁栄した。揚繰網漁船団は、最盛期には本窯に７事業所７ヶ統、伊福貴に８事業所 11 ヶ統の、合わせて 15 事業所 18 ヶ統に及んだ。このうち島内資本は、本窯が福祥丸漁業部、福宝丸漁業部、いなり丸漁業部の３事業所、伊福貴が石本水産㈱、大洋水産㈱樺島営業所、稲荷丸漁業部の３事業所であった。

揚繰網は、本船、母船、火船、中取船（運搬船）など合わせて５隻で構成され、乗組員は 30～35 人を必要としたので、漁業関係者は 1,000 人近くに及んだ。島民だけではまかないきれないため島外から多くの労働者がやって来て、島の人口は膨れ上がった。

漁獲したイワシはイリコや金肥として販売、男は漁師、女は加工に従事していた。加工したイリコは長崎方面へ出荷していたという。

戦後復興と共に始まったイワシ漁は 1951 年ごろには資源が減少に転じ、1955 年ごろからイワシは姿を消した。1952～53 年に島外系の網資本は退散し、地元の事業体も 1957 年には大きな負債を抱えたまま倒産した。イワシの揚繰網漁業が崩壊すると、乗組員たちは中通島・奈良尾のまき網船団や大手水産会社の遠洋漁業の乗組員に雇用されることになった。

郷土史家の川上弥久美さん（左）、昭和 30 年代の伊福貴の集落（右）

イワシが姿を消すと、かわって延縄漁業が盛んになり、マダイ、レンコダイ、イトヨリなどを獲った。またハマチの養殖も始まり３経営体が営んでいたが、その後徹底している。さ

らにマダイの一本釣りが盛んになるが、漁業は徐々に衰退していった。

このように漁業は変遷するが、島民たちは背後の山を段々畑として開墾し、サツマイモと麦を栽培したから、いわゆる半農半漁の生活だった。小麦は自給用、サツマイモは干してカンコロとして出荷していた。島には農協がなかったので、カンコロの出荷作業は漁協が行っていたという。カンコロは焼酎の原料だったようだ。

カクレキリシタン

上述したように椛島の先住者は瀬戸内海方面からの漁業移民で、本窯、伊福貴と芦ノ浦の３つの中心集落を形成した。いわゆる「地下」の集落である。その後、大村藩の外海地方から五島列島に移住した人たちの子孫が、福江島の三井楽と奥浦、久賀島、奈留島、若松島方面から椛島に再移住した。彼らは中心集落以外の山間部を開墾して点在集落を形成した。いわゆる「居付」の集落である。居付の祖先は大村藩の殿様であった大村純忠（1533～1587）の影響でキリシタンになった人々である。宣教師不在の 200 年以上の間にその信仰はキリスト教とは異なる日本型の土着宗教に変質しており、いわゆる潜伏キリシタンだった。彼らは、明治維新後のキリスト教解禁後も、復活キリシタンに改宗することなく、先祖伝来の土着化した信仰を持ち続けてきたいわゆるカクレキリシタンである。つまり椛島は、五島列島の多くの島々と同様に地下と居付が混住する島だったのである。

そして仲間内で独自の信仰集団を形成し、地下の集落との交流はほとんどなく、通婚関係も皆無だった。通婚は島内および島外のカクレキリシタンどうしの仲間内に限られた。

椛島のカクレキリシタンは各点在集落を単位とする信仰集団を形成しており、それを「帳（ちょう）」またはクルワといった。帳には２つの意味があり、一つは信仰の集団、もう一つは信仰集団の聖典である帳面を意味した。この帳面には日繰りやオラショ（祈りのことば）が記載されており、その内容は点在集落ごとに異なった。つまり「帳」とは、「集落ごとに固有の帳面を何代にもわたって引継ぎ、それを核として統合された信仰集団」と村田は述べている。この集団のリーダーが「帳方」、帳方を補佐して子供に洗礼をほどこす「水方」、及び補佐としての「下役」の３役があり、すべて男性が務めた。

椛島にはこの信仰組織である「帳」が５つあった。1951 年の調査では、椛島のカクレキリシタンの世帯は 233 戸に及び、島の全戸数の 1/3 を超えていた。しかし後継世代が次々と島外に転出し、信仰組織を維持することが困難になる。その結果、1971 年に５つの帳が合併して１つになり、檀家数つまりメンバーは 60 戸となった。長刀久次郎氏が帳方、浦本庫一氏が水方となったが、下役は欠員であった。

椛島の若者は都会に出て、島に残った者も高齢化し、また親も子供から呼ばれて年々都会へ流出し、過疎化が進んで後継者もいなくなった。1987 年には最後まで残った芦ノ浦のカクレキリシタン組織が解散し、椛島のカクレキリシタンの信仰組織は消失した。聖典としての帳を納めた帳箱を始めとする遺物は福江島の堂崎天主堂に移され、保管されている。

椛島のカクレキリシタンは末子相続が基本していた。これは椛島のカクレキリシタン独自の風習で、生きる上で最低限必要な３反の土地の相続が許された。「子供の独立にさいして耕作地の一部や家屋を譲り、みずからは残った子世代と別の家屋に同居して開墾をつづけて、同様の移転を総領から末子にいたるまで繰り返し、最終的に家督を末子に継がせると

いう相続形態」である。そして末子がその家の位牌を受け継いだ。

彼らは仲間内でクリスマスにあたる「おたい夜」、正月の「餅噛み」と「サンジュワン様の祭り」、1月15日の「山の神の祭り」などの年中行事を行っていたが、部外者にはほとんど秘匿されていた。川上さんは郵便配達をしていたから、カクレキリシタンの人達とも接触があったが、最後の最後に、「おたい夜」の写真撮影を許されたという。

川上さんがもっている資料の一部を支所の職員にお願いし複写してもらった。ちなみにコピー代は1枚20円だった。

五島ふくえ漁協椛島支所

公民館で川上さんの話を聞いた後、漁港の中央付近の船着場前にある五島ふくえ漁協の椛島支所を訪ねる。漁港内には15～16隻の漁船とほぼ同数の船外機が係留されていた。漁船は何れも数トンの小さなものばかりで、網の船はない。漁協の玄関口には若い組合員がたむろしていた。その中に、支所長の赤星さんがおり、２階の事務所で話を聞いた。

もともと島には本窯と伊福貴の両地区に漁協があったが、1994 年に両漁協が合併して椛島漁協になり、さらに1997年に旧福江市内の漁協が合併して現在の五島ふくえ漁協が誕生して椛島支所になった。

漁協の正職員は赤星さん１人で、彼は福江島から毎日船で通勤している。赤星さんのほかにパートタイマーの臨時職員がいるが、彼女は島の人だ。椛島支所の組合員は、正 14 人、准７人の21人である。このうち伊福貴地区は正13人、准３人、本窯地区は正１人、准４人で、漁業は伊福貴が中心である。一番若い組合員は30歳だ。2015年の国勢調査時の就業人口は 59 人であったが、このうちの 22 人が漁業に従事しており、島の主産業は衰退したとはいえ今でも漁業なのである。

漁協の建物（左）、漁港に係留されている漁船（右）

現在、椛島で営まれている漁業は一本釣り、延縄、刺網、潜水による採貝藻である。このうち一本釣を営む組合員が最も多く、７～８隻が稼働しているが、毎日出漁している船は３～４隻だ。一本釣りの対象はイサキ、タイ、アジなどで、５～７月はイサキの漁期に相当する。延縄は以前さかんに行われていたが、現在は２～３経営体が営み、専業は１経営体のみである。漁獲対象はイトヨリとレンコダイで、餌はキビナゴを用いる。刺網はキビナゴとイセエビが中心で、漁獲が期待できれば、全員が営む。最近はキビナゴが豊漁で、多くの組合員が出漁している。なお、キビナゴは６月と７月に禁漁になる。潜水漁業は２人が着業して

おり、漁期は盆と正月が中心で、アワビ、サザエ、ナマコなどを獲っている。最近はテーブルサンゴが増えており、藻場の減少から採貝藻は厳しい環境にあるという。

椛島の漁業は夜焚（夜間操業）がメインで、昼間は島にいる人が多い。島全体の最近の水揚金額は 3,000 万円ほどである。漁獲物は福江島にある産地市場に出荷する。

地のもん工房

漁協で話を聞いてから、取材の約束をしていた「地のもん工房」を訪ねた。この水産加工場は民宿増栄丸の女将が営んでいる。もともとこの民宿に泊まる予定で電話すると、最初は受け入れてくれたが、その後断られた。コロナ禍のなか、顧客を泊めていると周りから白い目で見られるというのが理由だった。狭い島だからさもありなんと諦めて、福江島に泊まって日帰りにすることになった次第だ。顔を出すと、代わりの者が迎えに行ったと言い訳をした。

地のもん工房の加工事業は 2010 年からスタートしているからすでに 10 年以上を経過している。民宿に泊まる釣り客に総菜品を提供したところ、土産物に欲しいと注文を受けるようになったのがきっかけで本格的な加工事業に着手した。現在生産している商品アイテムは、イトヨリ、レンコダイ、イサキ、アジなどの塩干品とアジとキビナゴの南蛮漬け、サバの煮つけ、アジとサバの昆布巻きなどの総菜品である。干物はふっくらソフトの仕上がりで、中身は柔らかいそうだ。

加工場は、魚の処理室と調理・パッケージの部屋に分かれており、処理室の方は「散らかっているから」との理由で見せてもらえなかった。商品を拝見しながら話を聞く。

加工原料のうち、アジとサバは松浦市にある西日本魚市場（大中型まき網の流通拠点）から購入し、その他の魚は島内から調達している。

加工場では女将の他に 4 人の女性高齢者がボランティアで加工作業を手伝っている。最高齢は 96 歳だ。皆が集まって話をするのが楽しいし、笑えるからとやって来るらしい。仕事があることは何よりの生きがいになるのだろう。

製品は漁協や集落の冷蔵庫を借りて保存しているが、基本的に注文を受けてから加工するそうだ。販売はデパートや物産会、地域イベントなどで販売するのが中心である。女将は高齢なのでインターネットなどの新しい媒体は使われておらず、特に宣伝もしていないという。

地のもん工房の加工場（左）、同加工場で生産している商品（右）

八坂神社

漁港の一角に蛭子神社が置かれている。一方、集落を一望できる背後の高台には八坂神社がある。地のもん工房での取材を終えてから、こちらを訪ねることにした。

集落の裏手に廻ると、鉄筋３階建ての旧小学校の教員宿舎があった。小中学校は休校になっていて教員はいないから、空き家なのだろう。その上に浄土真宗の西蓮寺とその墓地が置かれている。福江島富江の大蓮寺の末寺として 1955 年に独立したが、1997 年に法人を解散している。伊福貴集落には大蓮寺系の檀家が多いとのこと。

寺の脇の急な坂を登ると、石の鳥居があり、そこから長い石段を登った先に八坂神社がある。階段は約 700 段あるそうで、1927 年に完成している。年寄りには大変きつい坂で、途中で休み休み登ることになった。椛島は高齢化が多いから、草刈りや清掃などの作業は重労働に違いない。

参道の途中にある石の鳥居には昭和 30 年１月 11 日建立と彫られていた。最上段に社殿はなく、祠が置かれているだけだった。祠の中央は椛島の伝説上の開祖である桑原甚五左衛門を祀る祠、右が江戸時代の島の生業であった製塩の神である塩竈様、左がカクレキリシタン系の信仰対象が祀られているという。

西蓮寺の本堂（左）、八坂神社の石の鳥居と参道（右）

ツブラ島

八坂神社の階段から伊福貴の集落が一望でき、その前面に円錐形をしたツブラ島が横たわる。島の形がカタツムリ（現地ではマイマイツブラと呼ぶ）に似ていることからこの名がついた。島の面積は 1.47 ㎢、標高は 276m で、現在は無人島である。

1889（明治 22）年に福江島の奥浦から１世帯４人が入植し、のちに 13 世帯に増えて、1921（大正 10）年ごろには小学校の分教場も置かれていたそうだ。川上さんによると、ツブラ島の島民はカクレキリシタンで、外海地方で使われていた温石（おんじゃく）石を持っていたという。なお１戸だけ真言宗の家があり、つまはじきにされていたそうだ。

その後、1942 年に住民８人が犠牲となる機雷爆発事件をきっかけに離島者が相次ぎ、無人島になった。事故の顛末は次のとおりだ。

島民２人が海面に浮いている機雷を発見し、これを島に持ち帰った。機雷を引き揚げるために縄をかけて岸に引き寄せる途中、雷管が岩にぶつかり機雷が爆発した。この爆発で縄を曳いていた少年２人を含む７人全員と近くで見物していた少年をあわせて８人が犠牲にな

った。

以来、戦後になっても入植者はなく無人島が続く。島は旧福江市の所有となり、伊福貴地区に無償で貸与された。1960～1963 年にかけて、福貴町森林組合によりスギやヒノキの植林が行われている。その植林記念の石碑が集落内に置かれていた。植林からすでに半世紀以上が経つが、島の人口は激減しているので、森林の手入れをする労力もなく、おそらく植えられたまま放置され今日に至っているのではないだろうか。

伊福貴港の目の前に横たわるツブラ島（左）、島の植林記念碑（右）

伊福貴を 17 時に出発する第３便で福江島に戻る。船は本窯に帰港し、17 時 30 分に福江島に着いた。ターミナルのコインロッカーからバックパックを取り出し、ホテルまで歩く。福江市内の通りはコロナ禍とあって人通りは少なく、営業している飲食店も半分ほどだ。中華料理屋に入って、野菜炒めをつまみに、生ビールと焼酎を飲み、長崎ちゃんぽんを食べた。

令和３年６月 24 日

本窯

五島第一ホテルに荷物を預け、福江港まで歩く。ターミナル内の売店で、朝食用の弁当とお茶、昼食用に菓子パンを購入した。７時 25 発の「ソレイユ」に乗船し、椛島のもう一つの集落である本窯に向かう。本窯では私を含めて７人が下船し、うち釣り人が２人いた。本窯からは４人が乗船し、ソレイユは伊福貴経由で福江島に向かった。

船着き場の待合室に新聞を取りに来た 90 歳ほどと思われる古老によると、本窯地区には現在 25 戸、30 人が住み、ほとんどが単身世帯だという。郵便局に勤めていたというから確かな数値だろう。島の裏側の芦ノ浦には 43 戸 100 人が住んでいたこともあるが、現在は３戸だけになっているという（住基台帳上は２戸）。

早速、本窯の集落を歩く。集落の西はずれに旧教員住宅があり、そこから中年の女性がでてきた。五島市役所椛島出張所の職員で、最近、人事異動で着任したという。この住宅の前に、お祭りの時に神輿を収容する「お旅所」という建物があり、その前に樺島神社と書いた鳥居が建つ（古い神社なので昔の表記になっている）。ところがこの鳥居は合成樹脂製のイミテーションであった。鳥居は毎年、お祭りの度に島民が建て替えていた。しかし島の人口が減り、労力が確保できなくなったため、常時建っているようになったそうだが、仮設であることを示すためにイミテーションになったのだろうか。

「お旅所」の少し手前の高台に本窯地区の墓地があった。ところが島から人がいなくなり、転出先に墓地を改装した家が多いと見えて、墓石は少ない。墓石を撤去した跡に雑草が生えないようにコンクリートを塗布している区画が目立つ。その割合は全体の半分近くに及ぶ。高台の墓地からはクロマグロ養殖の生簀や集落全体が見渡せた。

船着場に戻ると、一緒の船で椛島に来た太っちょの青年が、先の古老と話していた。こんな青年が島に何しにきているのかと思っていたが、じつは衆議院議員の山田勝彦氏（農水大臣を務めた山田正彦氏の２男）のビラをポスティングに来たのだそうだ。

本窯に平地はほとんどない。人家は漁港背後の山際に概ね２列で並んでいる。ただすでに廃屋が撤去されて、敷地跡だけが残る区画が全体の半分近くを占めていた。墓地と同様、雑草が繁らないように敷地にはコンクリートが塗られている。廃屋が放置されたままの島を数多く見てきたが、椛島は例外である。撤去費用を自己負担し（役場で確認したところでは古い家の撤去費用を補助することはないとのこと）、残る人に迷惑が掛からないように配慮しているわけである。立派な心掛けといえるだろう。

集落内には、五島椛島郵便局、今は使われていない漁村センター、ふるさとセンターがある。五島市役所椛島本窯出張所を訪ねる。本窯にはかつて代官所が置かれていたので、椛島の中心であった。中世から近世にかけて、椛島ではその森林資源を利用した火力による製塩業が栄え、椛島は年貢として穀物に代えて塩及び薪炭を上納しており、本窯という地名もそれに由来していることはすでに述べた。

漁港内には漁船が２隻係留されているだけだった。この本窯地区には漁師は上述したとおり１人（正組合員）しかいない。

本窯の集落（左）、本窯の渡船待合所（右）

採石場と樺島神社

漁港の一番奥まったところに樺島神社が鎮座する。拝殿では地元の女性が電気掃除機で朝の清掃活動を行っていた。本殿の欅の太い大黒柱は、よく見ると張り物だった。神社はコンクリート製で 1982 年に新築、置かれていた神輿は 1997 年に新造されたものである。神社の建築費は約 4,000 万円、神輿は約 1,000 万円で購入した。

じつは、神社も神輿も、島の北部の田崎地区にある郷の共有地と個人の所有地の採石権を真興産業という会社に売ったお金でまかなわれている。1982 年に同社と採石場の契約が結ばれ、この時に得たお金で神社がつくり替えられた。田崎地区に産出する石は硬く、港湾建

設の捨て石や埋め立て用として適したものだった。

村田によると、伊福貴地区の蛭子神社の屋根の葺き替えを集落事業として行ったことに対し、本窯地区でも老朽化した樺島神社を新築ないし改装しなければなるまいと対抗心を燃やしたようだが、過疎化の進行で資金がない。そこで資金を得るために採石場の誘致を決めたという。

採石の現場に行くには山道を歩かなければならず、基本的に船を利用する。海からでないと現場は直接見ることができない。採石業者に船を出してもらう必要があり、奈留島から遠眼で見ただけだった。椛島では毎年、希望者に採石場の見学会を実施しているようで、椛島地区まちづくり協議会が２ヶ月に１回発行する「椛島だより」にそのことが書かれていた。

島内には神職はおらず、かつては近隣の奈留島の神主、現在は福江島の住吉神社の神職に委託しているらしい。

樺島神社の例祭は 10 月の第３土日に行われる。神社からお下りした神輿が町内を隅々まで練り歩き、先に示した「お旅所」に安置される。夕暮れから宝来丸という船を曳く。翌日は漁船によるパレード、昼から宮相撲が行われ、夕暮れとともに前日と同じく宝来丸の曳船が行われる。この船曳祭りは山口県光市の室津にあるものと類似しているとされ、椛島が瀬戸内海地方の移住者によって開拓されたのではないかという根拠になっている。この珍しい祭りは、1988 年に福江市民俗資料無形文化財に指定されている。

待合室でお会いした古老は、例年、欠かさず祭りをやってきたが、今年はコロナの影響で無理ではないかと話していた。

コンクリートづくりの樺島神社（左）、本殿内に置かれた神輿（右）

クロマグロ養殖

集落背後の高台からクロマグロの養殖施設がよく見えた。そこから施設の全景を写真撮影する。直径 30mほどの円形生簀が８基、それに小さな生簀が１基、整然と並ぶ。その先に観測タワーが見える。

この養殖の事業主体は椛島の島民ではなく、長崎市に本社を置く金子産業という会社だ。農林水産大臣を務めた金子岩三、その子息で長崎県知事を務めた金子原二郎（現参議院議員）の関係企業で、ニッスイ系である。同社は福江島の奥浦に事業所があり、そちらでもクロマグロ養殖を展開しているが、椛島に置かれている生簀は奥浦事業所が管理している。

椛島には作業所はなく、もっぱら船で奥浦からやって来て給餌作業をしている。奥浦と椛

島は直線距離で約 15 km離れているので、往復１時間ほどを要することだろう。会社側は事故等の不測の事態に臨機応変に対応するためにも島民を雇用したかったそうだが、応募する人がいなかったようだ。島で働ける世代の人は漁業の方が忙しいのが実情だという。かわりに会社では監視用のカメラを取り付けた。

後日、金子産業の奥浦事業所を訪ねたところ、奥浦の湾内には同じ規模の円形生簀が 10 基配置されており、椛島よりも養殖規模は大きい。事務所の人の話では出荷サイズは 60 kg 前後で、出荷まで約３年を要するそうだ。

クロマグロは国内生産量の約９割を養殖魚が占めているが、その供給地は五島列島周辺に比較的集中している。

本窯地区に置かれているクロマグロの養殖施設（左）、福江島深浦にある金子産業奥浦事業所（右）

伊福貴への道

椛島の主要集落である本窯と伊福貴を結んで県道が整備されている。この道はもともと山道のようなものだったが、1970 年から拡幅工事が始まり、1985 年に本窯と首ノ浦との間が、翌 1986 年には伊福貴と首ノ浦との間が完成し、本窯と伊福貴の間を大型車両が通行できるようになった。

本窯と伊福貴の間は約 5.3 kmの道のりである。この道を伊福貴まで歩くことにした。９時に本窯を出発する。椛島の海岸沿いは険しい崖が続くため、道路は山の中腹に作られている。所々に海岸に降りる道がある。後述するように首ノ浦から島の東側の芦ノ浦に至る道も 1998 年に拡幅工事が完了し、陸の孤島ではなくなった。

この道路沿いには「居付」の集落が点在している。最初の集落が竹ノ浦である。県道から細い坂道を下っていくと、一文字の防波堤で囲われた港があった。漁船１隻と船外機１隻が漁港に浮いていた。背後の山側に４～５軒の家が木々の中に埋もれている。１軒だけ洗濯物を干している家があったので、ここには間違いなく人が住んでいるのだろう。多分、漁港の船はこの家のものと思われる。

再び県道に戻って先に進むと、道路の下に今は住んでいない家が何軒も確認でき、山側にも草木に囲まれて石垣や階段が確認できた。おそらく竹ノ浦の次の越（腰？）首の集落に違いない。

県道の山側から流れ込む湧水が目立った。道路が湧水で濡れているところが多い。椛島の山は深いので水には苦労しなかったものと思われる。集落の点在を可能にしたのは、この豊

かな水だったにちがいない。

山の中腹に造られた県道（左）、草木に覆われた廃屋（右）

椛島小中学校

首ノ浦という島の最もくびれた場所、つまり地峡部に椛島小中学校があった。本窯と伊福貴のほぼ中間に相当する。小さな湾の奥を埋め立てて、椛島港が整備され、広い造成地の小中学校と校舎と体育館、そして校庭が置かれている。

椛島の両中心集落には、1874（明治７）年にそれぞれ尋常小学校が創立されている。また戦後の 1947 年には、両集落にそれぞれ中学校が創立された。しかし、子供の数が減ったことから、1965 年に本窯と伊福貴の両中学校が統合されて椛島中学校となり、小学校に先行してこの地に移ってきた。さらに 1973 年に本窯と伊福貴の両小学校が統合されて椛島小学校となり、中学校と同じ敷地に移転する。両集落の小中学生は片道約２㎞の道を歩いて通学することになった。移転した時点では道路の拡幅工事は終わっていないので、子どもたちは山道を歩いたに違いない。

しかし、人口の減少とともに子供たちの数も年々減少し、とうとう中学校が 2012 年から、小学校は 2017 年から休校になり、現在に至る。小学校が休校になる時点で小学生は１人いたが、中学生になってからは福江島に船で通学したようだ。

県道から小中学校の敷地に向かい錆びついたガードレールに沿って坂を下っていくと右手に４軒の家が並び、そのうちの２軒にはどうやら人が住んでいるようだ。埋め立てられる前からあった集落で、点在集落の一つの首ノ浦であろう。

小学校やグランド、港を散策し、再び坂を登って県道に出たところに、墓石が１つ置かれていた。周囲は草木で覆われ、墓参りに来る人もいないようだ。県道を登るとやがて峠にさしかかった。ここに五島市立椛島小学校と書かれた校門が残っていた。周囲には草が繁り、通学路は藪に覆われている。この場所の海抜は 29m と表示されていた。

地峡の最もくびれたあたりに左折する道がある。この道を２㎞ほど進んだ反対側の入り江に芦ノ浦の集落があり、かつては陸の孤島のようだ存在だった。アップダウンのかなりきつい道なので往復４㎞の道のりを考えると、帰りの船の時間に間に合わなくなる恐れがあり、芦ノ浦に行くのは断念した。

江戸後期に測量で芦ノ浦を訪れた伊能忠敬は阿波出身の漁師が 15 戸操業していたと記録しているそうで、その後居付も加わり、地下と居付が混住していた集落だった。上述したよ

うに住民基本台帳上では芦ノ浦には２世帯２人が住んでいる。

首の浦の点在集落（左）、椛島小中学校の校舎と校庭（右）

洋上風力発電

旧小中学校の反対側（南側）が天見ノ浦という湾になっている。この沖合海域にわが国最初の浮体式風力発電装置が設置されていたことを示す案内板が立っていた。ちょうど湾の沖合、約 1.5 ㎞のところに設置してあったようだ。この浮体式風力発電装置は、環境省の実証プラントで、戸田建設㈱、㈱日立製作所、九州大学、海洋エンジニアリング㈱、（独）海上技術安全研究所が参加した。

2012 年の小規模試験を踏まえて、2013 年には 2,000kw の風車を設置して運転を開始、2016 年２月まで発電が続けられた。その後、実証機を現在の五島市崎山沖に移動し、2016 年３月で実証事業を終了している。実証機の設置海域の水深は約 100ｍで、３点アンカーで係留していた。タワーの全長は 172ｍ、風車のロータ直径は 80ｍであった。

温室効果ガス削減のためにエネルギーの化石燃料からの脱却が求められている。風力発電は太陽光発電と並ぶ再生可能エネルギーの切り札である。わが国では、これまで立地が容易な陸上部での風力発電が中心だったが、海はその面積が広く、しかも風も強く、騒音などの影響が及ばないなどの利点があり、洋上風力への期待が高まっている。

洋上風力は海底に直接風車を建てる着床式と、海上に浮体を浮かべる浮体式に分かれる。着床式風力発電の立地場所は遠浅な海に限られることから、風力発電の発電量を増やすには、浮体式を普及させることが大きな課題になっていた。浮体式は、造船、建設、電気、ケーブルなど関連産業の裾野が広いことから大きな経済効果が期待できる反面、着床式に較べると、コストが高くしかも台風の多い日本ではリスクが大きいという短所もある。

ちなみに椛島沖の浮体式洋上風力は一応成功裡に試験を終了したが、その後進められた福島沖の試験は失敗している。長崎県内ではその後も洋上風力発電プラントの建設が進められようとしているが、その成否は今のところ未知数といえる。

旧小中学校近くの地方港湾・椛島港の用地に巨大な鉄製のアンカーのようなものが置かれていた。港湾事務所に確認すると戸田建設に用地を貸しているとのことだったので、風力発電装置の係留に使用したアンカーに間違いないだろう。

また、小規模試験機は洋上観測タワーに改造され、上述したクロマグロの養殖施設の沖に設置されている。

沖合に浮体式風力発電施設が設置されていた天見ノ浦湾（左）、旧小中学校脇に置かれていた固定用のアンカー（右）

長刀石

天見ヶ浦の地峡を過ぎて島の西側の伊福貴町に入ると、県道は海から遠ざかり、少し標高が高くなった。西側には、長刀（なぎなた）、野崎、毛吹、永田の各集落が点在していたようだ。現在は人が住む家はない。

県道から少し山の中に入ったところに長刀石という珍しい石があるというので、県道からガイドにしたがって山の中に入った。比較的大きな集落があったようで、道路脇に甕が散在し、廃屋が何軒も見られた。この一帯は長刀という点在集落だった。

観光客が時折来るようで道ははっきりしていた。行き止まりに長刀石があった。長さ４ｍほどの長刀のような形をした岩が地中から突き出ている。その下に不動明が祀られていた。

県道の脇には樹木が茂り、海をなかなか見ることができないが、海に近いところでは木立の間から毛吹の港が見え、漁船が１隻だけ係留されていた。

伊福貴への坂道を下っていく途中に小さな畑があり、その脇に廃屋があった。さらに下ると川が現れ、途中に取水口があり、浄水場が置かれている。ここから簡易水道が供給されているようだ。

長刀石（左）、永田集落の廃屋（右）

イノシシとヘビ

本窯で椛島にはイノシシはいないと聞いていた。その理由は、①潮流が速いので島に近づけない、②海岸は玉砂利なので上陸が難しい、という２点であった。ところが道路脇に箱罠

が置かれていた。罠があるということはイノシシを見た人がいるためだろう。ただし罠の周りは草が生い茂っているからあまり熱心でないのか、高齢化の進行で人手が足りないのか、はたまたイノシシの数が少ないのかもしれない。

もう一つ驚いたのは道路上でアオダイショウと遭遇したことだ。シャッターを押そうとする間に、すぐに草むらに消えていった。もともと家の周辺に生息しているヘビなので子供の頃はよく見たことがあるが、ここ 10 年ほどは見たことがなかった。後に診療所の医師に、「本窯から歩いてきた」と話したら、「ヘビを見なかったか」と聞かれたので、島にヘビが多いのは既定の事実のようだ。

道路上で遭遇したアオダイショウ（左）、道路脇に設置されているイノシシ用の箱罠（右）

寄り道しながらちょうど 12 時に伊福貴に着いた。４時間ほどかかったことになる。

漁協内の自動販売機でコーヒー飲料を買い、渡船の待合所で、福江島で購入してきたパンを食べる。例の太っちょの青年は両地区の各家に選挙用の資料をポスティングし終わり、私よりも早く伊福貴に着いていて、盛んにスマホをいじっていた。そのうち地のもん工房の女将がやってきた。どうやら私のために昼食を用意していたらしいのだ。

前日に引き続き出張所を訪ねる。まだ昼休みだったので、併設されている診療所の看護師さんはテレビをみながらソファーに横になっていた。13 時まで待つ。前日の事務の女性がやってきたので福江市史を閲覧し、椛島と久賀島の部分をコピーしてもらう。

再び待合所に戻り、船を待つ。椛島で５人が下船し、伊福貴では私と太っちょ青年が乗船した。本窯で５人が下船し、１人が乗船した。14 時 13 分に福江港に到着した。

福江港にはトヨタレンタカーの人が迎えに来ていた。そのまま営業所に直行し、レンタカーを借りて、奥浦地区にある堂崎教会のキリシタン資料館へ向かう。カクレキリシタンに関する資料はほんの一部のみで、復活キリシタン関係の展示が中心である。椛島のカクレキリシタンの資料はすべてここに保存されているということだったが、展示されていたのは芦ノ浦の川辺チリさんが提供した「三次わん様」という石に刻まれた信仰対象だけだった。

【文献】

竹田旦（1938）：４．五島樺島．離島の民俗．民俗民芸双書．岩崎美術社、東京．211-221.

福江市史編集委員会（1995）：福江市史、福江市．上巻 1174pp、下巻 928pp.

村田裕志（2000）：五島列島椛島のくらしと民俗．成城大学民俗学研究所紀要.

村田裕志（2002）：長崎県福江市椛島，海と島のくらし、沿海諸地域の文化変化．雄山閣．東京．472-481.

宮崎賢太郎（2015）：カクレキリシタン、長崎新聞新書、ｐ295．長崎新聞社、長崎、